IFLAミラノ大会を振り返って

メタデータ	言語: 出版者: 日本図書館協会 公開日: 2024-01-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦,太郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000188

小特集◆IFLAミラノ大会レポート

IFLAミラノ大会を振り返って

三浦太郎

◆ミラノ開催

イタリア・ミラノは伝統芸術と最新技術が響き合う都市という印象を受ける。

レオナルド・ダ・ヴィンチの最高傑作と呼び声の高い「最後の晩餐」を見れば，そこには，500年の歳月の重みと，それを現在，見ることを可能にしている最新の修復・洗浄技術の成果が垣間見られる。壁画完成から数年足らずで，湿気などの浸食や損傷を受けた「最後の晩餐」は，1977年以降20年以上かけて修復作業に取り組まれた。その結果，ダ・ヴィンチ亡きあと修復・加筆で塗り加えられた顔料が除去され，原形の線や色彩を取り戻したのである。過去の歴史遺産を現代，そして未来へと引き継ぐ。これが，ミラノという文化都市の大きなテーマとなっている。

2009年8月23日～27日，「図書館が未来を創る：文化遺産を礎に」をテーマとする「世界図書館情報会議（WLIC）：第75回IFLA年次大会」が当地の国際展示場（フィエーラ）で開催された。IFLA Express第8号の公式発表によれば，世界127か国から3,139名の図書館関係者が参加登録し（うち全日参加者は2,588名），219のセッションが設けられ，98の企業展示，103のポスター発表が寄せられた[1]。テーマ設定には，人類の知識基盤となる書物を保存しながら，技術革新の波に対処していこうとする図書館界の現在と，都市ミラノのもつ横顔とが重なり合っている。

イタリアの地でIFLA大会が開催されるのは，その発足時期にまで遡る。1927年9月，イギリス・エジンバラで開催された英国図書館協会（LA）創立50周年記念総会の席上，15か国代表の署名により「国際図書館（および）書誌委員会」が結成され，同委員会が1929年，ローマ・フィレンツェ・ヴェネチアの3都市で最初の年次大会World Congress of Librarianship and Bibliographyを開いたのである。大会には40か国から約1,300人が参加し，定款を採択して公式名称を「国際図書館協会連盟」(International Federation of Library Associations：IFLA）と定めた[2)3)]。イタリアではその後もローマで1951年と1964年の2回，IFLA大会が開かれている。

いっぽう，イタリアは“日常生活においても，「私はミラノ人」「私はシチリア人」と自己紹介し，イタリア人であることはせいぜいサッカーのワー

▲写真1．ミラノ市内のソルマーニ図書館（建物は16世紀に建てられ，やはり伝統が息づいている）

▲写真2．開会式（イタリア図書館協会会長マウーロ・グエリーニ氏が，大会組織委員長として挨拶した）

ルドカップの時ぐらいにしか思い出さない”とも評される国柄である[4]。紀元前1000年頃からすでに都市国家を形成し，紀元前後に世界帝国の中心として繁栄を誇ったローマと，12世紀に都市国家として独立し，14世紀末に公国としての地位を築いたミラノとでは，自ずと風土が異なる。4度目のイタリア開催ではあっても，新しくミラノが選ばれたことで，過去を礎とした未来志向という本大会の意識が強調されたように感じられる。

◆セッションの特色

本大会の219セッションのテーマは大きく分けると，次の四つにまとめられる。

⑴ 「礎」となる文化を特に意識し，歴史や保存に焦点化したもの，
⑵ 「文化遺産」の観点から博物館やアーカイブとの連携を論議したもの，
⑶ 「図書館」の現状報告，
⑷ 特に最新の電子技術を用いて，図書館サービスの「未来」を検討したもの，

である。いずれのセッションにも，大なり小なり四つの要素は含まれるが，焦点の置きどころに濃淡があると言える。

筆者の参加したセッションのうち，まず⑴を中心に取り上げたものに「分散的文化コレクション」（26日9：30〜12：45。貴重書・手稿本分科会，保存・保護分科会，図書館史グループの共催）がある。このセッションでは，スイスにおける古文書研究者のための貴重書デジタル化の取り組みe-codicesや，イタリア・ロンバルディア地方の図書館所蔵古文書（1500年代〜）の電子化などが紹介されたが，とりわけ印象的だったのは，イギリス・ラフバラ大学のスミス教授による，ラトビアにおける文化コレクション再構築についての発表であった。ラトビアは1940〜91年にドイツ第三帝国やソビエト連邦の占領統治下に置かれ，国の文化遺産が散逸する状況にあったが，現在，文書や博物資料を含め，散逸していたコレクションが国に「帰還」しつつある現状にあるという。一国の文化が歴史的な知識遺産によって形成されることを，改めて認識させられる内容であった。

⑵のLAM（図書館，アーカイブ，博物館）の連携を中心に議論したもので筆者の参加したものには，「LAM間の保存調査」（25日9：30〜11：30。資料保存コア活動（IFLA PAC）主催）や「過去の保存，未来の創造」（25日16：00〜18：00。アジア・オセアニア分科会主催）がある。前者には，脱酸処理に関する最新技法の紹介や，博物館内における湿度や照度などの空気管理に関する発表があり，とくに米国の博物館・図書館サービス研究所のキュート研究員による調査報告が興味深く思われた。同氏は，米国内に文化的なコレクション・アイテムが48億点存在し，このうち図書館は67%，博物館が20%，アーカイブが7%を所蔵するが，機関横断的な保存計画策定が必要と主張していた。

また，後者では，アジア地域の研究者による発表が組まれた。東京大学情報学環の研谷紀夫特任助教は，2008年に日本と海外のLAM機関に対して実施した質問紙調査の概要を報告し，日本ではいまだ作成されていない包括的なガイドラインの必要性を指摘した。ニューヨーク州立大学のシン教授が紹介した韓国「老斤里（ノ・グン・リ）アーカイブ」の創設も，目を惹く発表であった。老斤里は，朝鮮戦争中の1950年に米軍による韓国民間人の誤認虐殺事件が起き，これが1990年代に公表されることで著名となった場所だが，ここでのアーカイブ建設を通じて，“記憶とは文書館で集められるものではなく，作られ，しばしば作り変えられるものである”ことが実感されたという。文化機関は人びとの記憶の継承だけなく，その解釈や再形成に大きく踏み込むことを意識させられた。

⑶ 「図書館」の現状報告は少なくないが，ここでは「発展途上国の将来の図書館員に向けた準備」（25日11：45〜12：45。発展途上国における図書館情報学（LIS）教育グループ主催）への言及にとどめる。このセッションでは，アフリカ南部に位置するジンバブエと南アジアの大国インドの図書館学教育の抱える課題がそれぞれ論じられていた。二つの発表に共通するのは，ライブラリースクールにおける情報機器の不足や，中核的カリキュラムが技術の進展に対応していないこと，そしてLIS教育機関の卒業生の雇用先が決して多くない現状であった。即効的な解決は難しいが，これらの課題は多くの国に共有される。国際的に状況を把握し合い，多角的視野から解決策を模索していくことが重要であり，そこに国際会議の意義の一つがあると言えよう。

⑷の図書館サービスの「未来」を中心に検討したセッションとしては，「過去を未来に変える技術」（27日10：45〜12：45。「印刷字を読めない人びと

▲写真３．セッション風景（河村宏氏は口語文化を記録する言語として，点字の重要性を指摘した）

（Print Disabilities）にサービスする図書館」分科会主催）が挙げられる。このセッションではDAISYコンソーシアム会長の河村宏氏が，“知識転換は文化伝達のためのカギである”と述べ，DAISYの理念や具体的活動について発表した。河村氏はタイのモーケン族への調査事例などを紹介しながら，世界中のあらゆる土地に固有なオーラル文化遺産を保存する必要性と，その際に音声を書き遺す言語としての点字活用の重要性を指摘した。

いずれのセッションにおいても，図書館で継承される「過去」の文化遺産と，それを活かした「未来」の創造について，参加者の熱心な議論があったと言える。

なお，日本からの発表者は３名であった。研谷氏，河村氏のほか，放送大学の三輪眞木子教授が，24日にオフサイトで行われた「LIS教育の資格および質に関する検討」（24日９：00〜18：00。教育研修分科会主催）セッションにおいて，今年３月に筑波大学で開催された「アジア太平洋図書館・情報教育国際会議」（A-LIEP）の概要を報告した。この分科会では，LIS教育の国際化を目指す「ボローニャ・プロセス」の今後が議論され，LIS教育における国際協力の実現性が議論されている。筆者は不参加であったが，付記しておきたい。

◆おわりに

IFLA分科会には，現在，11名の日本人図書館関係者が委員として参加している。委員各位にはご多用中のところ参加していただき，この場を借りて御礼申し上げたい（政府情報・公的刊行物分科会の古賀崇氏と，児童・青少年分科会の依田和子氏には，本特集にも寄稿いただいた）。合わせて，発表者・参加者の方々にも感謝申し上げる。

また，26日夜にはドイツ文化センターミラノ支部主催の夕食会に参加させていただいた。これは同センター東京支部のクリステル・マーンケ図書館長の好意によって，JLA事務局で事前申込を把握していた日本人関係者をお招きいただいたもので，レオナルド・ダ・ヴィンチ国立科学博物館の広間を会場に盛大な会となった。マーンケ氏にも，心より御礼申し上げたい。

▲写真４．ドイツ文化センター主催の夕食会（８名の日本人がドイツ人関係者らと交流した）

最後になるが，旅行中，ある日本の参加者から，“IFLAで日本の発言が小さいが，JLAの政策をきちんと説明し，各国の図書館協会と国際的に協力することが必要ではないか”とのご意見をいただいた。また，別の参加者からは，“イタリアの博物館売店で見られる日本の商品は，春画かアラーキーの写真集しかない。もっと多様な日本文化を紹介することが国際交流事業なのではないか”とのご意見も伺った。襟を正して臨みたいと思う。

注・引用文献

1）“IFLA Express Milan, issue no.8”［http://www.ifla.org/annual-conference/ifla 75/xpress 8-en-2009.pdf］（最終アクセス日：2009年10月９日）

2）Joachim Wieder et al. “IFLA's First Fifty Years: are prise,” IFLA Journal, 28(3), 2002, p.107-117.［http://archive.ifla.org/III/75 ifla/75 index.htm］（最終アクセス日：2009年10月９日）

なお，現在のように英文名称に「and Institutions」が加えられたのは1976年のことである。

3）小泉徹「図書館にとって国際化とは何か：IFLA（国際図書館連盟）設立・発展の80年と近年の変化」『現代の図書館』vol.46, no.1, 2008, p.42-61.

4）田中ちひろ『ふだん着のミラノ案内』晶文社, 1996, 245p

（みうら　たろう：JLA国際交流事業委員会委員長，明治大学）

［NDC 9：010.6　BSH：国際図書館連盟］